

[書評論文]

Osamu Sawada, *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface. (Oxford Studies in Theoretical Linguistics)*.  
Oxford: Oxford University Press, 2018. vii + 254p. ISBN: 978-0-1987-1423-1.

窪田悠介  
筑波大学

## 1. はじめに

本書は（主に日本語の）スケール表現の意味・語用論的側面の形式意味論的アプローチによる研究であり、その内容は著者が2010年にシカゴ大学に提出した博士論文（Sawada, 2010）を発展させたものである。スケール表現の研究、また、旧来の真理条件と前提という二分類に収まりきれない意味の側面を構成的意味論（compositional semantics）の手法で扱おうとする、いわゆるCI研究は、ともに2005年ごろから大きく発展した。著者の澤田治氏（現・三重大学）は、ちょうどこの時期にスケール表現研究の一大中心地であるシカゴ大学の博士課程に在籍し、博士論文を執筆した。そして博士号取得後もこの二つの分野で精力的に国際的な学術誌や学会に成果を発表し続けている。本書は著者のこれまでの研究の集大成であり、分野の最新の研究成果であると言える。以下で議論するように、現在CI研究においては理論的に重要な問題が様々な言語現象の分析から浮かび上がってきており、理論的基盤を根本的に再考する必要性に迫られている。著者自身の本書での論考は、必ずしもそのような理論的な問題に正面から取り組むものではないが、本書は、批判的に読むことによって読者に問題のありかや、この分野の研究の将来の方向性について考えを深めるための豊富な材料を提供してくれる。本稿では、読者がそのような建設的な批判的考察を行うためのきっかけとなるような点を特に重点的にとりあげて、本書の内容を紹介することにした。

本書の構成は以下のようになっている。序論にあたる第1章で問題設定をした後、第2章で、扱う言語現象の整理をしている。この後、第3章で依拠する理論的枠組みの説明をして、第4章から第7章までを具体的な言語現象のケーススタディ（第4章：「何よりも」の談話マーカ儿的用法、第5章：「ちょっと」の談話マーカ儿的用法、第6章：「とても」の否定的用法、「もっと」の非累加的用法、第7章：意外性を表す「よっぽど」、「かえって」）にあてている。続く第8章と第9章では、それぞれ、個別のケーススタディか

ら見えてくる理論的問題と、理論研究と通時的な言語変化との間の関連について論じ、第10章で結論を述べて全体を締めくくっている。

## 2. 本書の概要

まず、本書の提案の中核に関わる概念の一つである「スケール」の概念について、本書が前提としている理論的アプローチを概観し、その後で本書の主張を簡単に要約してみたい（もう一つの中核的概念である CI については、以下3節で詳しく議論する）。

形容詞などの度合いを表す言語表現の意味論は、形式意味論の研究において古くから議論されてきているが（Klein（1980）など）、この種の言語表現の意味論の研究が活発になったのは、Kennedy and McNally（2005）による「スケール構造」の概念の提案以降である。Kennedy and McNally は、度合いを表す形容詞は、参照するスケールの構造の違いにより、真理条件の決定の仕方が異なるという主張をした。具体的には、*John is tall* と *The bottle is full* のような文を比べた場合、後者は、瓶が満杯である場合に真となるため、真理条件の決定に語用論的要因が関与しないが、前者は、何らかの文脈依存的な基準にもとづいてジョンの背の高さを判定している文であるため、文脈依存的な基準値が決まらない限り真偽の決定ができないという違いがある。

このように、度合いを表す形容詞は大きく分けて文脈依存的な基準に依存する「相対形容詞」と、そのような基準には依存せず、もっぱらその形容詞の意味自体に固有の限界点を参照する形で真偽が決定する「絶対形容詞」に分類され、両者は限界点があるかどうかという点で、参照するスケールの構造が異なる、という主張を Kennedy and McNally は行っている。形式意味論研究においては、Kennedy and McNally（2005）の提案以降、この「スケール構造」という概念を鍵にして様々な言語現象の分析を行う研究が活発になっている。

このような、もともと意味論分野で用いられていた「スケール」という概念を、語用論に関わるような現象の分析にまで適用することが有効である、というのが本書全体の大きな主張となっている。著者が扱っている現象は、語用論レベルにおける何らかの序列関係・程度性（当該コンテキストにおける当該の発話の重要性の度合いなど）を参照する表現である、談話マーカの「何よりも」や「ちょっと」と、程度性の側面はあくまで意味論レベルでの述定に関わる部分にとどまり、そのような程度性をもつ内容の述定に基づき、何らかの語用論的意味合い（例えば、程度の高さに関する意外性や驚きのようなもの）を付加する「よっぽど」や「かえって」のような表現に大別される。この二つのクラスの言語表現に関しては、一口に「スケール」の概念が意味解釈に関与するといっても、その関与の仕方が全く異なる。このため、著者はこの二つのクラスの言語表現の詳細な分析を通して、本書全体の主張として、以下にまとめられるような結論を導いている。

- **主張 1**： いわゆるスケール表現を修飾する副詞 (*very*, *slightly* など) の中には、真理条件のレベルで度合いの指定をするだけでなく、何らかの語用論的意味合いを表すものがある (以下著者にならぬこれらを「語用論的スケール表現 (pragmatic scalar expressions)」と呼ぶ)。
- **主張 2**： 語用論的スケール表現を適切に分析するためには、意味論のレベルだけでなく、語用論のレベルにおいても「スケール」の概念を認める必要がある。
- **主張 3**： 語用論的スケール表現は大きく二分され、「何よりも」のように純粹に語用論レベルでのスケールを参照するもの (「高次元スケール表現 (higher-level scalar modifier)」) と、「よっぽど」「かえって」のように意味論レベルでのスケールを語用論レベルで参照するもの (「低次元スケール表現 (lower-level scalar modifier)」) がある。
- **主張 4**： 語用論的スケール表現の存在、より具体的には、低次元スケール表現の存在は、当初意味論研究において提唱された理論装置である「スケール」という概念を、語用論のレベルでも理論装置として設定する必要があることを示している。

ここでは便宜上、著者の主張を一部評者の言葉で整理しなおした。特に、記述的なレベルでの主張である主張 2 と、理論的主張である主張 4 の区別に注意されたい。

本書が扱っている現象は、いずれも、形式意味論研究においてこれまで等閑視されてきたものばかりであり、このような語用論的な現象に関しても、形式意味論的アプローチが有効であるということをも具体的に詳細な分析を提示することで示した点は、本書の非常に重要な貢献である。特に、形式化を伴わない語用論研究と形式意味論研究の双方が、今後有機的に連携して発展していくための具体的な道筋を付けた点は高く評価に値する。

### 3. 本書の主張と批判的検討

#### 3.1. 理論的前提：CI (conventional implicature) 研究

上述のように、本書は、理論的に重要な言語事実の発掘において大きな貢献をなすものであるが、その理論的主張自体に関しては、問題がないわけではない。結論を先に述べると、評者は、主張 1、2 と (「低次元スケール表現」の特徴付けを除く) 主張 3 の分類自体には妥当性を認めるが、主張 4 は強すぎる結論であると考えている。以下では、著者自身の議論を概観した後、論理の飛躍や前提としている仮定の問題点を指摘し、著者の提示する言語データに対して少なくとも同程度の説明力を持つが、主張 4 (と主張 3 の一部) を認めない代案が存在する可能性を指摘する。

著者の主張をより深く理解するためには、まず、著者の依拠するもう一つの理論的前提である、CI の概念に関する最近の研究の動向を把握しておく必要がある。著者は、Potts

(2003, 2005) を端緒とする、いわゆる CI 研究のアプローチで日本語のスケール表現を分析している。CI は ‘conventional implicature’ (慣習的含意) の略だが、Potts の研究に始まる一連の研究においては、Grice (1967) や Karttunen and Peters (1979) などの初期の研究におけるこの用語の意味とは (関連するものの) 別の意味を持つ術語 (テクニカルターム) として理解するのが適切である。論争の激しい分野での術語の例にもれず、CI という用語の定義、そしてその適用範囲は、現在の CI 研究において大きな係争点となっている (本書 2 章 4 節、10 章 4 節、Amaral et al. (2007); Tonhauser et al. (2013); Martin (2015); AnderBois et al. (2013); Oshima (2016) など参照)。著者はこの論争自体には深く立ち入らず、CI の概念とそれに付随する分析装置を道具として用いることで、日本語の様々な表現の分析を行っている。

Potts (2003, 2005) は、文の意味内容のうち、直接真偽を問題にすることはできないが、会話の含意と違いキャンセル不可能なものを CI と呼んだ。(これに対し狭義の真理条件を ‘at issue content’ と呼ぶ。以下、煩雑さを避けるため「真理条件」という用語で通す。) CI の典型的例として Potts は挿入句的修飾表現 (1a) や日本語の敬語 (1b) (Potts and Kawahara, 2004) を挙げている。

- (1) a. Lance, **a cyclist**, won the Tour de France.  
 b. 田中教授が本をお書きになった。

(1a) では、Lance が自転車競技者であるという命題 (P) が、Lance がツール・ド・フランスの覇者であるという命題 (Q) とともに、(1a) のキャンセル不可能な帰結 (entailment) として導かれる。ここで、P は (1a) が発話される文脈における会話の参与者間での共有知である必要はないため、前提 (presupposition) とは異なると考えられる。同様に、(1b) が真かつ適切な発話である状況においては話者が田中教授を尊敬しているという事実が了解されるが、これも必ずしも聞き手にとって既知の情報とは限らないため、(普通の意味での) 前提ではない (ただし Oshima (2016) 参照)。

CI を真理条件から区別するテストとして、Potts は命題をスコープにとる演算子 (否定、条件文前件、疑問文、様相表現など) からの独立性を挙げている。これは前提のテストとして古くから知られているものと同じである。条件文の例を以下に挙げる。

- (2) a. If Lance, **a cyclist**, wins the Tour de France, then everyone will be surprised.  
 b. 田中教授が本をお書きになったら、皆でお祝いをする予定だ。

(2a) からは (1a) からと同様 P が帰結する。(これに対して Q は帰結しない。) 同様に、(2b) からは (1b) からと同様、話者の田中教授への敬意が了解される。ここで、Potts が挙げているテストだけでは、前提と CI を明確に区別できない点に注意が必要である。実際、Potts (2003) 以降の研究では、まさにこの点が大きな論争的の一つとなっている。

この点に関しては著者自身の主張とその問題点を以下でさらに詳しく議論する。

Potts は、上のテストに見られる CI の真理条件からの独立性を根拠に、CI が真理条件とは独立した意味のレベルで計算される CI の「多次元構成的意味論」を提唱した。著者は Potts の理論の McCready (2010) による改良版を用いて日本語の様々な表現の構成的意味論を詳細に分析している。

### 3.2. 本書の主張 (第 4 章 (「何よりも」) 第 7 章 (「かえって」))

本書の中核の第 4~7 章で扱われている現象のすべてに触れることは紙幅の都合上不可能なので、ここでは比較的分かりやすい例である、第 4 章の「何よりも」と第 7 章の「かえって」をとりあげて、著者の主張を概観する。

「何よりも」は (3) のような例で、当該の発話が、文脈で発話可能な発話の中でもっとも適切なし重要である、という意味を表す談話マーカーとして機能する。

(3) (この街に住みたい理由はいろいろだが、) **何よりも**、この街には君がいる。

著者は「何よりも」の談話マーカーとしての機能を高次元スケール表現の CI として分析する。著者の提案では、「何よりも」は真理条件的には何も意味を付けたさないが、CI として、「発話の適切性」のような、語用論のレベルでの序列関係 (スケール) を参照し、その序列の中で、実際に発話のされた文の位置づけを規定する表現であるとされる。この分析により、「何よりも」の談話マーカーとしての機能は真理条件とは独立であるので (「いや、そんなことはない」などの応答で) 直接否定することができないという事実がうまく捉えられる。また、「何よりも」が発話行為に関するオペレーターであるという提案から、この用法の「何よりも」が平叙文だけでなく、疑問文や命令文とも共起する (「何よりも、宿題をまず片付けなさい」) 事実もうまく説明できる。

第 7 章では、「よっぽど」とともに「かえって」が扱われている。著者は、「かえって」は「何よりも」とは違って、語用論レベルにおいて直接真理条件のレベルでのスケール (つまり、(4) であれば、暑さの度合い) を参照する、低次元スケール表現であると主張する。著者による (4) の分析は概略 (5) のようになる。

(4) (今年は異常気象だ。) 今年は東京のほうが沖縄よりかえって暑い。

(5) **真理条件**: 今年は東京のほうが沖縄より暑い (P)

**CI**: 普通は沖縄のほうが東京より暑い (Q)

真理条件と CI の間のコントラストから、驚きや意外性、というような意味合いが付随的に出てくる。Q が CI なのか前提なのかという点をひとまず置いておくと (この点に関しては以下でより詳しく議論する)、この分析で「かえって」の意味の中核を適切に捉えられていると考えられる。(特に、CI であるにせよ前提であるにせよ、Q は直接真偽を問題

にできる内容ではない点に注意。(4) に対して、「# そんなことはないよ、普通は沖縄のほうが涼しいよ」という応答は不適切である。)

上で概観したような言語現象の観察に基づき、著者は「語用論的スケール」という概念に関して、冒頭の主張 1-4 からなる大胆な仮説を提示している（理論的提案である主張 4 がその中核をなす）。この仮説は大変興味深いものの、評者の見る限り、著者が出している言語データだけでは、この仮説を支持する証拠としては十分でない。本書の著者の議論は、一つの立場を明確に打ち出すこと自体を目的化しているようにも見られ、結論を急ぐあまり、それを支える論証にいくつか重大なほころびが見られる。以下、問題が大きい点一つに焦点を絞って、著者の論の展開のどこに無理があるかを具体的に指摘する。（他に重要な論点で議論が通っていない箇所としては、CI トリガーの解釈が単に統語的な位置に基づいて決まるという、不要かつ不当に強すぎる仮定を前提とする場合のみに成り立つ議論に基づいて Harris and Potts (2009) の提案を退ける部分（第 8 章）がある。）

### 3.3. 批判的検討と代案

本書の議論におけるもっとも重大な問題は、CI と前提を分けるテストとして著者が提案しているものが、テストの役割を果たさない点である。このため、著者が CI トリガーとして分析している言語表現の多くものに関して、当該の言語表現の CI 的意味とされているものうち少なくとも一部を前提のほうに回収する代案が、検討の余地のあるものとして残されている。著者が主張 4 において「語用論レベル」と呼んでいるものは、真理条件と前提とは独立した、別個の「意味次元」として解釈が計算される、Potts の多次元意味論における CI のレベルにほかならない。このため、もしこのような代案が低次元スケール表現のすべてに関して残されており、当該の表現のスケールの意味合いが前提と真理条件のほうに回収できるとすると、主張 4 はその根拠を失い崩壊する。そして、多次元意味論を用いてこれらの表現を分析する根拠も大きく揺らぐことになる。以下、著者の議論の問題点を指摘した後、実際、主張 4 は保つことが難しいと考えられることを指摘する。

著者は 2 章 4 節で前提と CI の違いを区別する方法を議論しており、ここで、前提と CI の違いとして、前提投射を阻む働きをする言語表現（いわゆる *plug* (Karttunen, 1973)) である命題態度述語に埋め込んだ際の振る舞いを挙げている。著者は、前提と CI の違いは、前者が命題態度述語により投射を阻まれるのに対し、後者は投射を阻まれない点にあるとする。この「証拠」として著者は以下の例を対比的に提示している。

(6) Sue believes that Sam's kangaroo is sick, but that's ridiculous — Sam doesn't own a kangaroo. (Potts, 2007)

(7) Sue believes that Chuck, a confirmed psychopath, is a suitable babysitter — #but

Chuck isn't a psychopath.

(Potts, 2005, 2007)

この二つのデータから言えるのは (i) 所有格表現の前提命題は、命題態度述語に投射を阻まれる解釈が可能であり、(ii) 挿入句的修飾要素の CI は、命題的態度述語に吸収されず主節まで投射する解釈が可能という二点のみである。特に、(6) からは、所有格表現の前提命題が命題態度述語により必ず<sup>1)</sup>投射を阻まれるとまでは言えない点に注意されたい。実際、(*Sam's kangaroo* という記述が、信念保持者ではなく、話者の視点からのものであるという解釈である) いわゆる *de re* 解釈 (*Sue believes that Sam's kangaroo is a dog, but that's ridiculous — a kangaroo is a kangaroo and it can never be a dog*) では所有格表現の前提命題は (7) の CI 同様主文主語でなく話者に帰属させられる。

著者は、第4章以降の個々の言語表現の分析において、「主節への投射/話者への帰属が可能」という観察を、問題となっている意味内容を前提ではなく CI と判定する主な根拠として繰り返し用いている (p. 93, p. 148)。だが、この論理が成り立たないことは、上の議論より明らかであろう。また、同様の理由で、「よっぽど」のように、明示的な証拠なしに前提ではなく CI として分析されている現象に関しても、「主節への投射/話者への帰属が可能」という観察は CI 分析の根拠としては使えなくなる。

なお、*de re* 解釈には、LF での QR により表層位置より高い統語位置で解釈される、といった特殊な要因が関わっている可能性があるため、前提トリガーをより典型的なものである状態変化動詞 (*stop* など) や累加表現 (*too, also* など) に差し替えて上のテストを維持する可能性は残されている。この際は、著者が CI の投射の例として挙げているデータがモーダル述語などを含む複雑なものであることを考慮に入れ、テストに使う文はこの点を統一した以下のようなものにする必要がある。

- (8) a. 太郎はあのラーメン屋がよっぽど美味しいと思っているらしい。  
 b. 太郎はジョンがタバコをやめたと思っているらしい。  
 c. 太郎はどうやらジョンが幸子にも言い寄ったと思っているらしい。

評者の内省では、著者が CI とする (8a) の「よっぽど」の意外性を話者に帰属させる解釈が可能なのと同様、(8b, c) でも前提を話者に帰属させる解釈が可能に思われる。たとえば (8c) は、太郎はジョンが幸子だけに言い寄ったと信じており、他の女性にも言い寄ったことを知っているのは話者だけという状況でも適切に発話可能と思われる。

結局、命題態度述語への埋め込みの、CI テストとして有効性は疑わしいと言わざるをえない。また、もう一つのテストの候補である発話状況での既知性は、前提の *accommodation* の問題により紛れが多く、これもテストとして使いにくい。このため、前提と CI を明確に区別するテストはまだ見つかっていないと結論せざるをえない。

このことは本書の結論 (特に主張 4) に対して重大な意味を持つ。何故ならば、著者が

CI トリガーとして分析する現象すべてに関して、前提として分析する可能性を再検討する必要があるからである。このうち談話マーカの「何よりも」や「ちょっと」などは、意味的、語用論的機能の性質上、おそらく CI 分析の妥当性を保てるだろう。問題となるのは、著者が「低次元スケール表現」と呼ぶ一連の表現である。評者はこれらの現象の多くは、著者が CI としている意味内容の大半を前提と真理条件の方に回収できると考える。そしてそのような再分析を行った際、主張4に明確な根拠が残るかは非常に疑わしい。紙幅の都合上、低次元スケール表現のすべてに対して代案を示す余裕はないので、ここでは上で著者の分析を概観した「かえって」の例だけを検討する。

著者自身も認めるとおり、「かえって」の意味の少なくとも一部分は前提である。そこで、(4) に関して以下のような代案を考えてみよう。

(9) **前提**：普通は沖縄のほうが東京より暑い

**真理条件**：今年は東京のほうが沖縄より暑い

**CI**：(前提と真理条件の対比に基づく) 驚き／意外感の表出(ないし、そのような感情の、真理条件の帰属先と同一の認識主体への帰属)

ここで重要なのは、この代案においては、CI の意味内容は一切真理条件のレベルのスケールを参照していない点である。また、CI が真理条件と前提との間に存在する対比に基づくということから、CI の帰属先がそのような対比の認識主体と同定される、という点も保証されるため、埋め込み環境において「かえって」の解釈が認識的モダリティの生起位置に依存する事実も、「CI と真理条件で judge が同定される」という仮定を立てる著者の分析と実質的に同じ方向性で捉えることができると考えられる。ここでは紙幅の都合上詳細に述べることが出来ないが、このような、CI のレベルで直接スケールを参照しないような代案が、著者が低次元スケール表現と呼んでいるものすべてに関して可能であるように評者には思われる。

そもそも、著者が「低次元スケール表現」と呼ぶ言語表現の CI はすべて、何らかの主観的な感情の表出であり命題的なものではない。そのような性質の意味内容が、スケールという、真偽が問題となる命題的な述定を理論的に分析するための仮構装置のひとつにすぎないものを直接参照するというのは(少なくともモンタギュー以来のモデル理論的意味論の通常の仮定においては)概念的に不自然である(これに対して、(9)のように、スケール性を伴う命題内容に基づいての感情表出というものは、何ら矛盾をはらんだ概念ではない)。したがって、これらの表現に関するデフォルトの仮説 (null hypothesis) は主張4を否定するものであろう。より強い仮説である主張4を擁護するためには、デフォルトの仮説を退ける、相当に強い経験的根拠が必要である。評者の見るかぎり、本書において著者はそのような根拠を提示することに成功していない。



#### 4. おわりに

最後にいくつか雑多な点に関して読者の注意を促しておきたい。まず評者の手許にある初版一刷は、タイポや編集ミスがやや目立った。大半は無害 (p. 179 ‘word variable’ ⇒ ‘world variable’ など) だが、p. 131 (1) (ほか数か所) の例文の文脈設定の ‘Taro’ (‘the speaker’ とすべき) などは無用の誤解を招く可能性もあり紛らわしい。さらに、単なる編集ミスとは言えない点として、1章2節の最後で Bach (1999) らによる多次元意味論に対する代案の不十分な点を指摘すると宣言しておきながら、10章3節の該当箇所では具体的な問題点の議論が一切なく、主張が首尾一貫していないという問題がある。また、本書は Potts/McCready の枠組みを用いて形式的な分析を提示することを目的の一つにしているはずだが、示された分析の中には形式的に意味をなさない表記を含むものが多数ある。問題が多いものを挙げておくと、p. 94 (36)、(37) の ‘the given scale’ という表記 (意図は明確だが、この分析案を著者の仮定と整合する形で形式化できるかは決して自明ではない)、p. 138 (18) の CI の変項  $d$  (ここは先行研究を引き、これが Potts (2003, 2005) 以来 CI 研究において議論が紛糾している、いわゆる ‘binding problem’ の例であることを指摘すべきところである) などがある。また、同じ箇所とそれ以降第7章と第8章で頻出する、真偽値を値とする論理式の後に ‘for  $j$ ’ という自然言語の句を付け加えた表記 (‘ $d > d'$  for  $j$ ’ など) も、意味と意図が不明瞭である (p. 138 (18) に限って言えば、単に ‘ $d > d_j$  ( $d_j$  は  $j$  の期待する度合い)’ のように直せばよいように思われる)。

本稿における議論では批判的な指摘が多くなってしまったが、最後にもう一度本書の掛け値なしに優れている点を強調しておきたい。本書が扱っている言語現象はどれも非常に興味深く、またこれらの現象が形式的なアプローチの射程に入るものであることを示した点は、意味論・語用論研究における大きな貢献である。そして、これは必ずしも著者自身の本意ではないかもしれないが、このような多様な言語現象を、多次元意味論という理論装置で分析するという方向を突き進めた結果、当該の理論装置の可能性のみならず、限界が (図らずも) 明らかになった、という点も本書の貢献と考えるべきであろう。理論は所詮道具でしかなく、その限界がはっきりしたところで再整備が必要となるのが理論研究の常である。この意味で、本書の最大の意義は、CI 研究の新たな理論展開を示唆するような、重要な言語現象の掘り起こしを行っている点にあるといえよう。本書からすでにその予兆が感じられる、この分野での根本的な理論の再構築が近い将来進むことを期待したい。

#### 参考文献

Amaral, P., C. Roberts, and E. A. Smith. 2007. “Review of *The Logic of Conventional Im-*

- plicatures* by Chris Potts.” *Linguistics and Philosophy* 30, 707–749.
- AnderBois, S., A. Brasoveanu, and R. Henderson. 2013. “At-Issue Proposals and Appositive Impositions in Discourse.” *Journal of Semantics* 32, 93–138.
- Bach, K. 1999. “The Myth of Conventional Implicature.” *Linguistics and Philosophy* 22, 327–366.
- Grice, H. P. 1967. “Logic and Conversation.” William James Lectures, Harvard University. Reprinted in P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* 3. Academic Press.
- Harris, J. A. and C. Potts. 2009. “Perspective-shifting with Appositives and Expressives.” *Linguistics and Philosophy* 32, 523–552.
- Karttunen, L. 1973. “Presuppositions of Compound Sentences.” *Linguistic Inquiry* 4, 169–193.
- Karttunen, L. and S. Peters. 1979. “Conventional Implicature.” In C.-K. Oh and D. Dinnens, eds., *Syntax and Semantics*, vol. 11, 1–56. Academic Press.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally. 2005. “Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates.” *Language* 81(2), 345–381.
- Klein, Ewan. 1980. “A Semantics for Positive and Comparative Adjectives.” *Linguistics and Philosophy* 4(1), 1–45.
- Martin, S. 2015. “Supplemental Update.” *Semantics and Pragmatics* 9(5), 1–61.
- McCready, E. 2010. “Varieties of Conventional Implicature.” *Semantics and Pragmatics* 3(8), 1–57.
- Oshima, D. Y. 2016. “The Meanings of Perspectival Verbs and Their Implications on the Taxonomy of Projective Content/Conventional Implicature.” In *Proceedings of SALT* 26, 43–60. eLanguage.
- Potts, C. 2003. *The Logic of Conventional Implicatures*. Ph.D. thesis, UC Santa Cruz.
- Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Potts, C. 2007. “The Expressive Dimension.” *Theoretical Linguistics* 33(2), 165–197.
- Potts, C. and S. Kawahara. 2004. “Japanese Honorifics as Emotive Definite Descriptions.” In *Proceedings of SALT 14*, 235–254. Ithaca, NY: CLC Publications.
- Sawada, O. 2010. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers*. Ph.D. thesis, University of Chicago.
- Tonhauser, J., D. Beaver, C. Roberts, and M. Simons. 2013. “Toward a Taxonomy of Projective Content.” *Language* 89(1), 66–109.